

# 經濟論叢

第九十三卷 第六號

---

低開發国の諸問題 .....	松井清	1
シェーカーズ .....	穂積文雄	19
社会主義社会の性格について .....	木原正雄	41
企業理論と投資理論 (一) .....	山田保	61

---

昭和三十九年六月

京都大學經濟學會

# 社会主義社会の性格について

木 原 正 雄

一九一七年、ロシアに社会主義国が生れ、第二次大戦後には、社会主義が世界的な体制にまで発展したことは、マルクス主義の古典が指摘したように、資本主義から共産主義への、世界史的な規模での移行が、理論的のみならず、歴史的にも検証されたことをしめしている。

社会主義は、もはや空想的願望でもなく、抽象的な分析・研究の対象でもない。社会主義は、今日、われわれの生活と、きつてもきりはなせない関係にあり、あらゆるところ、あらゆるばあい、問題となっている。

このように、社会主義が、日々の問題にならざるをえないのは、現存する社会主義国が、まだ、おおくの立ちおくれをもっているにもかかわらず、人間社会のより高度な発展段階であることを、しめしているからにはかならない。

ところが、一方では、人間社会のより高度な段階への発展の必然性を否定し、急速な技術進歩や核兵器の出現によって、資本主義と社会主義の差異は、しだいになくなり、資本主義は「福祉国家」に、社会主義はより資本主義に接近するかにようにいわれている。社会主義経済学における一部の傾向は、このような見解を助長していることも、また否定することはできないであろう。

(1) さいきん、ソ連では、「共産主義建設は、物質的関心をよりどころとすべきである」という命題<sup>1)</sup>が政策のきそとなり、「利潤」が、企業経営

を刺激するための手段となっている。

社会主義経済のもとにおける「利潤」という経済的カテゴリーを、正しく規定し、その役割を正しく位置づけることなく、「利潤追求を企業経営を刺激するための手段とし、社会主義的利潤と資本主義的利潤を混同し、それによって資本主義経済の利潤の原則を、社会主義経済の計画化の原則にすりかえる」なら、「経済自由化の政策を実施する」ことになり、「社会主義経済を資本主義経済に退化変質させる」ことにもなりかねないことは、周揚の指摘するところである。(周揚「哲学・社会科学工作者の戦時的任務」外文出版社、一九六四年、五八ページ参照)

広い意味での経済学における「共産主義部分」の経済学を確立するうえで、共産主義の低い段階、第一の段階といわれ、資本主義から共産主義への過渡的段階にあたる社会主義の性格をあきらかにし、どのように位置づけるかは、共産主義経済学の構成と方法にかかわる、きわめて重要な問題であるとともに、社会主義・共産主義の経済諸法則と経済的カテゴリーを正しく規定し、その発展の合法性をあきらかにするうえでも、きわめて重要な問題である。

社会主義・共産主義のもとでは、経済学と経済政策との関係は、資本主義のもとでとくらべ、はるかに密接である。それだけに、社会主義建設・共産主義への移行の理論的諸問題の解明は、いちじるしく重要な意義をもっている。ところが、社会主義の性格、その歴史的位置づけについては、かならずしも解明されたということとはできない。しかも、さいきん、とくに社会主義・共産主義を建設しているソ連邦と中国において、重要な意見の相異がみられる。そこで、ここでは、まず、社会主義の性格とその歴史的位置づけについて、考察することにする。

(1) 陶铸「关于过渡时期的规律问题的商榷」『人民日报』一九六〇年八月五日および呉棟「社会主義社会的過渡性質」『経済研究』一九六〇年、第五期、第四三一—五八頁参照。(なおこれらの論文の邦訳は、陶铸のものは、『中ソ事情』、一九六〇年九月二十八日号、呉棟のものは、中国研究所(山下龍三訳および訳者解題)のもの、および『経済評論』一九六一年〇月がある)

社会主義建設の合法性と社会主義社会の過渡的性質についての、わが国の文献には、つぎのものがある。副島種典「社会主義社会の過渡的性質について」、『思想』一九六一年二月、同「社会主義建設における一般性と特殊性」、『経済評論』、一九六一年四月、杉野明夫「社会主義社会の過渡的性質をめぐって」、『研究と資料』第十四号、一九六一年八月、同「社会主義建設の合法性について」、『経済評論』、一九六一年九

月、副島種典「社会主義建設の合法性について——杉野明夫氏の批判に関連して——」、『経済評論』、一九六二年六月、山内一男「社会主義経済の過渡的性格について」、『一九六二年十月、杉野明夫「資本主義から共産主義への移行の諸問題」、『経済評論』一九六二年十二月号。

一

資本主義社会から共産主義社会への過渡期は、革命的な転化の時期であり、それに照応した政治的過渡期の国家としては、プロレタリアートの革命的な独裁がいかにありえない。このことは、マルクス主義の古典が指摘しているとおりにある。マルクスは、つぎのように、のべている。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁でしかありえない。」<sup>1)</sup>

(1) 『ゴータ綱領批判』邦訳『マルクス・エンゲルス選集』第十二巻、二五四ページ。

ここでいう過渡期は、資本主義から共産主義への過渡期である。いうまでもなく、一つの社会経済構成体から、他のより発展した社会経済構成体への転化にさいし、それぞれ移行の時期、たとえば、封建制から資本主義への過渡の時期が存在する。一つの構成体から他の構成体への転化の契機は、いかなるばあいでも、例外なく、新しい構成体の利益を代表する階級による社会的変革である。つまり、一つの社会経済構成体から他の構成体への転化は、たんに自然発生的な成長過程ではない。このことは、歴史的にも理論的にも立証されているところである。

資本主義から共産主義への移行も、この例外ではない。社会主義革命による労働者階級の権力掌握が、共産主義への移行の、不可欠の前提条件である。

社会的変革を契機とした、一つの構成体から他の構成体への移行は、過渡的な時期の存在を必然的なものにする。しかしながら、資本主義から共産主義への過渡期と、それ以前の構成体のばあいには、過渡期とあいだには、根本的にことなる特徴がみられる。このような根本的にことなる特徴は、一つの構成体から他の構成体への転化の不可欠の前提である社会的変革の性格によって規定される。すなわち、共産主義への移行を実現するための前提であり、かつ出発点である社会主義革命のもつ特徴が、一つの歴史的時期を構成する資本主義から共産主義への過渡期の存在を必然的なものとし、また、その性格を規定する。

では、社会主義革命は、どのような特徴をもっているのか。

社会主義革命の特徴をあきらかにするため、ブルジョア革命とのちがいをみてみよう。

レーニンは、ブルジョア革命と社会主義革命とのあいだの基本的な相異の一つについて、つぎのようにのべている。「封建制から成長してくるブルジョア革命にとっては、封建社会のすべての側面を、徐々に変化させる新しい経済組織が、旧体制の胎内で徐々にできあがってくる<sup>1)</sup>。したがって、「ブルジョア革命が当面したのは、以前の社会のすべてのきずなを一掃し、すて去り、破壊するという、ただ一つの任務があっただけである。あらゆるブルジョア革命は、この任務を遂行することによって、この革命にもとめられているいっさいのことを遂行する。すなわち、それは、資本主義の成長を強めるのである。」<sup>2)</sup>

(1) Ленин, Соч., т. 4-6, том 27, стр. 67.

(2) Там же, стр. 67.

ところが、社会主義革命のばあいには、状態は、まったくことなる。すなわち、「歴史のジグザグによって、社会

主義革命をはじめなければならなかった国にとって、その国がおくられていけばいるほど、古い資本主義関係から社会主義関係への移行は、それだけ困難である。ここでは、破壊という任務のうえに、新しい、前代未聞の困難な任務、——組織的任務がつけくわわる。」

(1) Ленин, Собр. соч., том 27, стр. 67.

資本主義経済組織は商品生産の発達とともに、封建制の胎内でしだいにつくりだされていく。したがって、ブルジョア革命が、はじまるときには、「資本主義関係のできあいの形態があるが、しかし、ソビエト権力、すなわちプロレタリア権力は、資本主義のもっとも発達した諸形態——それは、本質的には、工業の小さな上層をとらえているだけあって、農業にはまだほんのわずかしかおよんでいない——をのぞけば、これらのできあいの諸関係をうけとらな<sup>1)</sup>い。」したがって、「記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関全体を、一つの巨大な機構に、数百万のひとびとが、一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化させる<sup>2)</sup>」という、「巨大な組織上の任務」、すなわち、社会主義経済を建設するという困難をともなう任務の解決が、社会主義革命の主要の目標となる。

(1) Ленин, Собр. соч., том 4-е, том 27, стр. 68.

(2) Там же, стр. 68.

(3) Там же, стр. 68.

このように、「ブルジョア革命は、公然たる革命がおこるまえに、すでに封建社会の胎内で成長し、成熟した資本主義制度の、おおかれすくなかれ、できあがった形態が、すでに存在するときにはじまるのがふつうである<sup>1)</sup>」。これにたいし、プロレタリア革命のばあいには、「社会主義制度のできあがった形態が存在しないか、あるいは、ほとんど

ど存在しないときにはじまる」。

(1) Орланд, Вопросы ленинизма, стр. 11-е, стр. 115.

(2) Там же, стр. 115.

スターリンは、「レーニン主義の諸問題によせて」のなかで、ブルジョア革命とプロレタリア革命の相異点をあきらかにするなかで、それらの革命の、特徴をひじよにあざやかにのべている。スターリンは、基本的な相異点として、つぎの五つをあげている。すなわち、(一)ブルジョア革命は、封建社会の胎内に、資本主義経済形態がすでに存在するときにじまるが、プロレタリア革命は、社会主義制度の存在しないときにはじまる。(二)ブルジョア革命の基本的任務は、権力を奪取し、すでに存在するブルジョア経済に適応させることとなるが、プロレタリア革命の任務は、権力を奪取するだけでなく、そのあと、社会主義経済を建設しとげることである。(三)ブルジョア革命は、権力の奪取により完成されるが、プロレタリア革命のばあい、権力奪取は、革命のはじまりにすぎず、権力は、新しい経済を組織するテコとして利用される。(四)ブルジョア革命は、一搾取者グループが他の搾取者グループにとってかわるだけであり、古い国家機関の破壊を必要としないが、プロレタリア革命は、プロレタリア階級が権力をにぎるものであり、古い国家機関を破壊し、新しい機関をつくらざるをえない。(五)ブルジョア革命は、勤労者を長期にわたり、ブルジョアのまわりに結集しておくことはできないが、プロレタリア革命のばあいは、プロレタリアートとその他の勤労者との同盟をむすぶことができるし、むすばなければならぬ。(Orland, Там же, стр. 115-116)

なぜなら、封建制度も資本主義制度も、ともに生産手段の私的所有にもとづく構成体であるため、封建制度の胎内に、資本主義的諸関係の自然成長的の発生と発展を阻止するものはない。したがって、商品生産の発展は、必然的にブルジョアの生産関係の発展をうながす。

ブルジョア革命のばあいには、私的所有そのものを廃止するのが目的でなく、私的所有のわく内で、ただその形態をかえるにすぎない。ということは、ブルジョア革命のばあい、封建領主という搾取者の権力が、ブルジョアジーという搾取者の権力にとってかわるだけであり、生産手段の私的所有にもとづく搾取制度は一掃されず、ただ搾取の方法と形態とがかわるだけである。

ブルジョア革命がおこるときには、資本主義生産関係が、自然成長的に発生し発展し、おおかれすくなかれ、できあがった形態が存在している。したがって、ブルジョア革命の任務は、権力の奪取によって、政治権力を、すでに発生し、発展しつつある資本主義経済に照応させることにほかならない。したがって、ブルジョア革命のばあい、権力の奪取が、革命のはじまりであり、かつおわりでもある。

社会主義革命の目的は、生産手段を社会的所有にかえ、人間による人間の搾取を一掃することである。生産手段の社会的所有にもとづく社会主義的諸関係は、生産手段の私的所有にもとづき、勤労者階級の搾取による剰余価値の生産を目的とする資本主義社会の胎内に発生し、成長することはない。つまり、プロレタリア（社会主義）革命は、社会主義制度のできあがった形態の存在しないときにはじまる。したがって、プロレタリア革命にとっては、権力の奪取は、革命のはじまりにすぎない。

社会主義経済は、資本主義社会の胎内に、自然成長的に発生し、発展することはない。したがって、プロレタリア革命により、労働者階級が権力を掌握してから、社会主義生産様式の生成過程であるとき、べつの過渡的時期、すなわち「資本主義から共産主義へ移行する特殊な段階、時期が、歴史上存在せざるをえない」のである。

(E) Ленин, *Соч.*, изд. 4-е, том 25, стр. 431.

プロレタリア革命にとっては、権力の奪取のみならず、古い経済をたてなおし、新しい社会主義経済を建設するという組織上の任務があり、新しい経済の組織にあたっては、労働者階級によって奪取された権力が、テコとして利用される。社会主義革命は、権力の奪取という瞬間的なものではない。したがって、マルタスの指摘しているように、資本主義社会と共産主義社会とのあいだの時期は、「前者から後者への、革命的転化の時期」(傍点—木原)にほかな



らないのである。このような革命的転化の時期に照応した政治的過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない。<sup>2)</sup>

- (1) 邦訳『マルクス・エンゲルス選集』第十二巻、二五四ページ。  
 (2) 同石

さきにも述べたように、マルクスは、「ゴータ綱領批判」のなかで、つぎのようにのべている。「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のものでもありえない。」

共産主義は、資本主義社会の胎内に、自然成長的に発生し、成熟するものではないが、共産主義は、「資本主義によって生みだされた社会勢力の作用の結果」であり、歴史的に資本主義、資本主義制度の廃墟のうえにうちたてられるものである。

- (1) Ленин, *Собр. Соч.*, 4-е, том 25, стр. 430.

したがって、共産主義社会にいたる特殊な段階、過渡的時期が存在するのである。この時期は、共産主義のまだ低い段階であり、ふつう社会主義とよばれる段階である。そのため、この段階では、まだ「経済的に完全に成熟したものの、資本主義の伝統や痕跡から、完全に自由なものではありえない」。資本主義から生まれたばかりの共産主義社会には、「あらゆる点で、経済的にも、道徳的にも、精神的にも、この社会ができてきた母胎である旧社会の母斑が、まだくっついて」いる。そして、この旧社会の痕跡は、ながい期間にわたってのこらざるをえない。

- (1) Ленин, *Собр. Соч.*, 4-е, том 25, стр. 442.

- (2) 邦訳『マルクス・エンゲルス選集』第十二巻、二四一ページ。

共産主義の前提は、生産手段を、社会全体の共有財産にうつすことである。生産手段を共有財産にうつすことによ

り、搾取制度のきそが、とりのぞかれ、人間が人間を搾取することが不可解になる。しかしながら、生産手段を、社会全体の共有財産にうつすだけでは、「個々の人が、生産を占有しているという「不公正」だけを廃絶するにとどまらざるをえ<sup>1)</sup>ず、分配の欠陥と、「ブルジョアの権利」の不平等とを、すぐさま除去することはできない<sup>2)</sup>。したがって、共産主義の高い段階にいたるまでは、消費手段を、労働におうして、分配せざるをえない。

(1) Ленин, Соч., 4-е, том 25, стр. 438.

(2) Там же.

生産手段が、個々人の私有財産であることをみとめ、それにきそをおく、「ブルジョアの権利」は、生産手段が、社会の共通財産にうつされることによって、なくなる。しかし、消費手段を、「労働におうじて」分配しなければならぬいかぎり、社会の成員のあいだに、消費手段を分配し、労働を分配するための規制者として、「ブルジョアの権利」は、のこらざるをえない。このことは、分配の欠陥である。欠陥ではあるが、これをさけることはできない。なぜなら、生まれでたばかりの共産主義社会では、「権利の基準を、すべてぬきにして、社会のためにはたらくことを、ただちにまなぶなどかかんがえることは、空想におちいることなしには、不可能なことである<sup>1)</sup>」し、資本主義を廃止し、権利の基準をぬきにして、社会のためにはたらくことを、ただちにまなぶようになるための、経済的諸前提は、生産手段を共有にうつすだけでは、えられるものではないからである。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 25, стр. 439.

(2) Там же. 参照。

資本家を収奪し、生産手段を共有財産にうつすことによって、すなわち、生産力の無限の発展を阻止していた資本

主義を廃絶することによって、生産力にとつて、無限の発展の可能性がひらかれる。しかし、資本主義から生まれたばかりの段階では、資本主義の伝統や痕跡から、完全に自由ではないし、生産力水準が低いため、消費資料を分配し、労働を分配するための規制者としての「ブルジョア的権利」を除去することができるほど、経済的に完全に成熟していない。では、共産主義の高い段階は、どのようにして実現されるのか。共産主義の高い段階は、人間が、分業に奴隸的に従属することがなくなり、資本主義からもちこされた精神労働と肉体労働の対立が消滅し、「ブルジョア的権利」という基準にもとづかなくても、人間が、社会のために、自分の能力におうじて、自発的にはたらくほど、共同生活の基本的な規則をまもる習慣を十分もつようになり、労働が、生きるための手段であるだけでなく、それ自体「第一の生活欲求」になり、個人の全面的な発展にともない、生産力も増大し、協同的富のすべての源泉が、いつそゆたかに、わきでるようになったとき、はじめて実現される。すなわち、そのときには、社会の成員がうけとる生産物の量を、社会が規制する必要はなくなり、各人は、自発的に、それぞれの能力におうじてはたらし、各人は、その欲望におうじて、生産物を自由にくけとるといふ、共産主義の準則が実現され、「ブルジョア的権利」を完全にとりのぞくことができるようになるであらう。

ふるい社会の母班は、行政的措施によってとりのぞくことができるものではない。「人類が、資本主義から、直接にうつることができるのは、社会主義、すなわち、生産手段の共同所有と各人の労働におうじた生産物の分配にすぎない。」「物資の生産や分配は、直接の命令によって、共産主義的に組織することができるのではなく、」<sup>2)</sup>『各人は能力におうじて、各人には欲望におうじて』とかきしるした旗を、たかくかかげることのできる共産主義へは、過渡的な段階である社会主義をつうじて、しだいに成長転化していかざるをえない。

- (1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 24, стр. 62.  
(2) Там же, том 33, стр. 35-36.

社会主義は、共産主義への第一の段階であり、一つの歴史的時代をなすものである。しかし、このことは、社会主義が、一つの独立した社会経済構成体である、ということの意味するものではない。社会主義社会は、資本主義から共産主義への過渡的時期に照応した、過渡的社会である。

- (1) ソ連邦で、社会主義社会を固定化し、定式化することによって、一つの社会経済構成体とみなすようになったのは、よえにも指摘したようにスターリンの論文「弁証法的唯物論と史的唯物論」(一九三八年)の影響によるものである。(拙稿「社会主義経済学の対照について」『経済論叢』第九十一巻、第六号、三〇—三二ページ参照)なおこの見解にたつ個々の著作については、杉野明夫氏「社会主義社会の過渡的性格をめぐって」『研究と資料』14、四五ページ参照)

## 二

資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、なぜ過渡期が存在するか。また、その過渡期は、一つの階級社会が、他の階級社会に移行するばあいの過渡期とはことなり、歴史上の一時代をなすのはなぜか。資本主義社会と共産主義社会とのあいだに、歴史上の一時代をなす過渡期が存在する必然性は、さきにも述べたように、社会主義・共産主義建設の前提である社会主義革命の性格によって規定される。

ここで指摘しなければならないことは、資本主義から共産主義への過渡期は、社会主義革命により、労働者階級が権力をにぎってからはじめられてはじまる、ということである。世界史的に、人類は、全体として、資本主義から社会主義・共産主義への移行の時期にあるが、社会主義革命によってはじまる過渡期とは、厳密に区別することが必要で

ある。なぜなら、社会主義・共産主義建設は、社会主義革命なくしては、ありえないからである。

(1) 第二次世界大戦後、東南ヨーロッパにおける人民民主主義諸国の成立を、あたかも「議会の道」をつうじての、「平和」的な社会主義への移行の典型とみなされ、議会で多数を占めることと国家権力の問題が混同され、あるいはすりかえられ、あたかも、「議会の道」をつうじて、社会主義へ移行することができるかのような見解がみられるが、このような見解は、正しくない。

このように、「資本主義と共産主義のあいだに、一定の過渡期があることは、理論上疑いをいれない」ばかりでなく、歴史的にも確証されるところである。この過渡期は、「死滅しつつある資本主義と生まれようとする共産主義との闘争、いかえれば、打ちやぶられたが、絶滅されていない資本主義と、生まれはしたがまったく弱い共産主義との闘争の時期」であり、資本主義から共産主義への革命的転化の時期である。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 30, стр. 87.

(2) Там же.

(3) 邦訳『マルクス・エンゲルス二巻選集』上巻、二二二ページ。

このように、資本主義から共産主義への過渡期、すなわち社会主義の段階は、資本主義と共産主義との闘争の時期であり、革命的転化の時期にほかならない。闘争の時期であり、革命的転化の時期というのは、とりもなおさず、社会主義・共産主義の建設をめざす、質的変化の過程にほかならない。というのは、社会主義・共産主義の建設は、たんに技術の進歩、生産力の増大によって実現されるものではない、ということである。技術の改善、生産力水準の向上は、共産主義建設の物的きそではあるが、それだけで共産主義は実現されない。技術進歩が、あたかも資本主義と社会主義・共産主義との差異をなくし、あるいはまた、社会主義国からの経済援助によって、後進国は社会主義建設ができるとかんがえるのは、経済社会の発展における質的転化を否定し、資本主義にくらべより高度な社会的経済制

度をつくりだすという、社会主義革命と社会主義・共産主義建設の任務を否定するものにほかならない。

資本主義にくらべ、より高度な社会的経済制度をつくりだすため、もっとも重要で、もっとも主要なものは、つぎの二つに集約することができる。一つは、労働生産性の向上である。資本主義にくらべ、労働生産性が向上し、水準がたかいことである。労働生産性の向上なくしては、共産主義への移行が不可能なことは、いうまでもない。労働生産性向上のために不可欠なことは、燃料、鉄鋼、機材、化学工業などの基幹部門の発展をもとにした、最新技術で裝備された大工業の物質的基盤を確立することである。これは、生産力の進歩という物質的側面である。もうひとつの側面は、精神的・政治的側面であり、住民大衆の教育と文化の向上であり、国民大衆を啓発し、文化水準をたかめることである。

(1) Ленин, Соч., т. 4, с. 29, стр. 53.

第二は、労働生産性を向上させるための高度な労働組織の確立である。高度な労働組織を確立するためには、なによりもまず、勤労者の自覚的規律性をたかめ、労働熟練度の向上、労働強度の増進、生産力の発展にともなう労働組織の改善が必要である。社会主義競争は、とりもなおさず、労働生産性をたかめるための、個々の勤労者の競争の社会主義的組織化にほかならない。高度な労働組織の中核は、勤労者の規律向上であり、そのため、つねに政治的・思想的改造が必要なことはいうまでもない。

(1) Ленин, Соч., т. 4, с. 27, стр. 228.

このように、高度な社会的経済制度をうちたてるために必要なことは、(1)労働生産性の向上と(2)高度な労働組織の確立であるが、いずれのばあいも、勤労者の思想革命、がともなわなければ実現することができないものである。

技術の改善は、本来「労働生産性の増大と社会的富の増加を意味する」。技術は、つねに、ある一定の生産関係をはなれては存在しえない。資本主義のもとでも、技術は不断に改善される。競争と生産の無政府性は、企業に技術の改善を強制する。技術の不断の進歩は、資本主義的、生産を増大させ、大企業の経済的意義を増大させ、確固たるものにする。しかしながら一方、「独立の小生産者を駆逐し、その一部分をプロレタリア化し、のこりの部分についても、その社会経済生活でしめる役割を縮小」する。資本主義のもとでは、技術の不断の進歩は、不断に社会的不平等を増大し、有産者の無産者とのへだたりを拡大し、いろいろの困窮を増大させる。わが国における中小企業の未曾有の破産件数、「合理化」による勤労者の状態の悪化、公害の増大など、新技術にもとづく設備投資にささえられた「所得倍増計画」のもとで生じているいっさいのことは、技術の改善が、資本主義のもとでは、不断に、いろいろの困窮を増大させていることをしめすものにほかならない。とくに、わが国のばあい、外国から導入された技術がおおいため、困窮を二重に増大させている。

(1) Ленин, *Соч.*, *кн. 4-е, том 29, стр. 81.*

(2) Там же, *стр. 80.*

技術の改善は、資本主義の胎内に、社会主義経済形態を生みだしたり、資本主義と社会主義との差異をなくすものではない。技術の改善は、生産手段と流通手段をよりいっそう集積させ、資本主義企業における労働過程をますます社会化させるが、それは、資本主義生産関係を共産主義生産関係にかえる物質的可能性をつくりだすにすぎない。

(1) わが国では、昨年末いらい、企業の倒産数は、急速に増大し、二月には、破産件数二百三十八件、負債総額三百五十一億円と、史上最高の記録をしめし、いごもこれをうまわる規模を増大し、四月には、さらに最高を更新し、負債額一千万円以上のものだけでも三百三十二件をかぞえ、倒産企業の負債総額は三百六十三億九千九百万円にたった。このことは、たんに、金融引締め政策の結果だとか、経営放漫政策の結果で

はなく、国家独占資本主義の段階における必然的帰結のあらわれであり、金融引締め政策、その他独占資本に有利な諸政策は、その必然的過程を促進したものにはかならない。

(2) 生産と資本の集中、集積は、資本主義のもとでは、不況と恐慌をとおして、弱小企業の吸収、合併により、急速にすすむのが、一般的傾向である。活況や好況時には、集中、集積度は若干低下し、不況と恐慌等には、集中、集積度は上昇するという過程をつうじ、独占体の経済的地位は急速に強固なものになっていく。しかし、さいきん、わが国においては、好況時においても、集中集積度は低下せず、かえって上昇傾向をしめしている。国家独占資本主義のもとにおける、財政投融资あるいは銀行をつうじての資金配分が、独占体に有利におこなわれているによつて、ますますこの傾向は助長され、他方、中小企業の地位は、ますます低下している。

### 三

さきへのべたように、資本主義から共産主義への全時期が、過渡期である。したがって、共産主義の低い段階である社会主義は、全体として過渡的にほかならない。つまり、社会主義は、革命的転換の時期であり、質的転換の時期である。したがって、社会主義を、「一つの独立した社会形態とみなし、定型化する」ことは、ただしくない。

(1) 陶鑄「关于過渡时期的規律問題商榷」『人民日報』一九六〇年八月五日。

しかしながらこのことは、陶鑄も指摘しているように、この過渡期のなかで「段階を分けることができなるとか、分けるべきではない、ということではなく」、また「歴史の発展過程で、一定の段階をとびこえることができる、ということの意味するものではない」。

(1) 陶鑄 前掲論文  
(2) 右同

社会主義は、労働者階級が政権を掌握し、基本的生産手段の公有制をうちたてたときからはじまる。しかしながら、



さきへのべたように、労働者階級による権力の奪取は、広い意味での社会主義革命のはじまりにすぎない。工業、農業、商業その他国民経済における主要な部分の社会主義的改造が完了して、はじめて社会主義革命はおわる。なぜなら、社会主義経済形態（ウクラード）は、資本主義の胎内に、すなわち生産手段の私的所有にもとづく古い社会に発生し、成長することはないからである。このことはまた、資本主義から共産主義への移行は、長期の発展過程が必要であること、すなわち、その過渡期は、一つの歴史的一時代をなすことを意味する。

そこで、この過程は、二つの段階に分けて考察することが必要となる。すなわち、第一の段階は、資本主義から社会主義をうちたてるまでの段階。この時期は、広い意味での社会主義革命の時期にあたる。第二の段階は、社会主義から共産主義への移行の段階である。

新しい社会・経済制度は、資本主義制度の廃墟のうえにたてられる。したがって、長期間にわたり、古い社会の痕跡をとどめ、社会主義の段階には、経済、政治、思想の面で、資本主義の母斑が、いろいろのかたちでのこらざるをえない。

このような母斑が、完全に一掃されなければ、共産主義の高い段階は実現されない。社会主義の段階は、なによりもまず、このような母斑を一掃する過程にほかならないからである。

資本主義から共産主義への移行は、階級社会から無階級社会への移行である。したがって「社会主義は、階級をなくすことである」<sup>1)</sup>。

(1) Ленин, Собр., 4-е, том 30, стр. 92.

階級を完全に廃絶するには、なによりもまず、搾取者、すなわち、地主と資本家を打倒することが必要であり、こ

のためには、地主や資本家の所有を廃止しなければならない。しかし、これだけでは、階級を完全に廃止することはできない。階級を完全に廃止するためには、「生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村の区別をも、肉体労働と精神労働の区別をも廃止する必要がある」<sup>1)</sup>。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 29, стр. 388.

労働者と農民の差異をなくし、すべてのひとびとを働き手にするためには、「生産力の発展における巨大な進歩が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗を克服する必要があり、またこれらの残存物とむすびついた習慣と因習との巨大な力を克服する必要がある」<sup>1)</sup>。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 29, стр. 388.

階級をなくすには、工業と農業の区別、都市と農村の区別、肉体労働と精神労働の区別をなくし、すべてのひとびとを働き手にすることが必要である、このような階級を完全になくすことは、長期にわたる過程であり、生産力の巨大な進歩にもとづく、経済全体の組織的改造と、古い社会の残存物とむすびついた習慣や因習の力を克服するための思想的改造とがとってすすめるることによって、はじめて解決される。したがって、「具体的な実例模範で大衆を教育し」、大衆の政治的自覚をたかめ、その自発性と創意にもとづく思想的改造は、「資本主義から共産主義の過渡期の主要な任務」である<sup>1)</sup>。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 28, стр. 191.

資本主義から共産主義への時期は、全体として一つの過渡期であり、それは、階級を廃絶する過程である。したがって、この過渡的な全時期は、新しいものと古いもの、成長しつつある共産主義と死滅しつつある資本主義との闘争

によってつらぬかれてゐる。「階級をなくすことは、長い困難な、ねばり強い階級闘争によってなされる。資本の権力がたおされたあとでも、ブルジョア国家が破壊されたあとでも、プロレタリアートの独裁が樹立されたあとでも、(旧社会主義と旧社会民主主義の俗物どもが考へてゐるように)、階級闘争はなくなならない。それは、その形態をかえるだけで、多くの点で、かへつていっそうはげしくなる。」

(1) Ленин, Соч., 4-е, том 29, стр. 359.

ゆえに、このような過渡期の基本矛盾は、「誰が誰を」の問題にはかならない。「誰が誰を」の問題を解決し、階級を完全になくすためには、なによりもまず、「一階級の独裁、すなわち、被抑圧諸階級のなかでも、搾取者を打倒できるだけでなく、かれらの反抗を容赦なく鎮圧できるだけでなく、さらに、ブルジョア民主主義的イデオロギー全体、自由と平等一般についての素町人的空語全体(マルクスがとつきの昔にしめしたように、この空語は、じつさいには、商品所有者の「自由と平等」、資本家と労働者の「自由と平等」を意味する)と思想的に絶縁できる階級の独裁の時期が必要である。」

(1) Ленин, Соч., 4-е, том 29, стр. 360.

プロレタリアートの独裁は、搾取者にたいするためだけの、たんなる暴力ではなく、暴力を主としたものでもない。資本主義から共産主義への革命的転化の時期に照応した政治上の過渡期における国家は、プロレタリアートの革命的独裁にほかならないが、この独裁の主要な本質は、プロレタリアートの組織性と規律性であり、この本質は、階級を完全になくすために、ながく存在しなければならぬし、また必要である。

(1) Ленин, Соч., 4-е, том 29, стр. 386.

なぜなら、過渡期の基本矛盾である「誰が誰を」の問題は、たんに、プロレタリアートと古いブルジョアジーとのあいだの問題ではない。地主と資本家など古い搾取階級が打ちたおされても、「誰が誰を」の矛盾は、なくならない。社会主義革命の時期がおわり、社会主義制度がうちたてられたあとでも、労働者と農民の階級的差異は、まだのこっているし、階級矛盾も階級闘争も存在する。階級差別、階級矛盾、階級闘争が存在することは、ある一定の条件のもとでは、新しいブルジョア分子が生れる可能性をもっている。

このことは、古い搾取階級である地主や資本家が打ちたおされ、国民経済のなかで、社会主義経済形態が、支配的になったあとでも、資本主義が復活——とくに、それは、外部の資本主義努力と結合することによって——する危険性を、つねにもっていることを意味している。資本主義から共産主義への移行時代がおわらないあいだは、「搾取者には、必然的に再興の望みがのこされていて、この望みは、再興の企てに転化する」。社会主義が、世界体制にまで発展した段階においても、他方では、同時に、資本主義世界が存在するかぎり、資本主義復活の可能性は、完全になくならない。

(1) Ленин, *Собр. соч.*, т. 4, стр. 28, с. 233.

現実には、社会主義国家が存在せざるをえないのは、階級的差異、階級矛盾、階級闘争が存在するからにはかならないのであって、階級が完全になくなる時、はじめて国家は消滅する。ところで、階級間の差異を一掃させることは、共産主義が完全に導入されてからでしかできない。

(1) レーニンは、また、「階級対立と階級闘争のあるところでは、国家は、存在しない」(Ленин, *Собр. соч.*, т. 4, стр. 25, с. 359)ことを強調し、労働者と農民の差異がなくなり、すべてのひとびとが働き手となり、これらの働き手が、自由で平等な協同関係にもとづいて生産を組織しかえる社会になれば、はじめて「国家機構全体を、考古博物館にうつす」ことになるだろうとのべている。

(2) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 28, стр. 191.

このばあい、社会主義国家は、もちろん、ブルジョア国家とおなじではない。ブルジョア国家は、社会主義革命のあいだに、廃絶される。社会主義革命のあとでうちたてられる国家は、半国家にはかならない。「資本主義と「無階級社会」<sup>1)</sup>、共産主義とをへだてる歴史的時期全体」に必要な国家は、「死滅しつつある国家、すなわち、ただちに死滅しはじめると、また死滅せざるをえないように構成された国家だけ<sup>3)</sup>」であり、それは、とりもなおさず、プロレタリアートの独裁にはかならない。

(1) Ленин, Соч., изд. 4-е, том 25, стр. 369.

(2) Том не, стр. 385.

(3) Том не, стр. 374.

階級の消滅とともに、国家もまた死滅する。しかしその消滅の過渡的形態は、国家から半国家をつうじ、非国家へと移行するのであって、プロレタリア独裁から人民国家へ移行するのではない。国家が存在するのは、階級が存在するからである。階級的差異がなくなれば、国家もまた消滅する。社会主義革命によるブルジョア国家の廃絶——半国家（プロレタリアートの独裁）——社会の利益をみまもる単純な管理機能へ、というのが、国家消滅の過程であり、これ以外の過程はありえない。